那 珂 遺 跡 群 21

－第59次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第564集

1　9　9　8

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めています。しかし九州の主都として発展を続ける本市においては、都市機能整備のための各種の開発事業もまた多く、やむを得ず失われる文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書はそうした遺跡のひとつで、都市計画道路博多駅五十川線整備に先立ち、博多区那珂５丁目地内に所在するする遺跡について行った発掘調査の成果報告書です。

調査は極めて限られた範囲内でありましたが、発掘調査の結果古代の遺物を多量に包含する層などが検出され、福岡市有数の大遺跡である那珂遺跡の解明に、大きく寄与する成果が得られました。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた福岡市土木局を始めとする多くの関係者の方々に対し、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成10年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　町　田　英　俊

本 文 目 次

Ⅰ．は じ め に …… 1

1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査体制 …… 1

Ⅱ．調 査 の 記 録

1．概要 …… 1
2．事業地内の既往の調査 …… 2
3．検出遺構 …… 2
4．包含層 …… 4
5．出土遺物 …… 4

Ⅲ．小　　結 …… 11

挿 図 目 次

Fig. 1　調査地点図(1:4000) …… 2
Fig. 2　調査区位置図(1:500) …… 3
Fig. 3　遺構配置図(1:100) …… 5
Fig. 4　包含層土層図(1:40) …… 6
Fig. 5　出土遺物(1:3) …… 7
Ph. 1　南半区全景（南から） …… 8
Ph. 2　北半区全景（南から） …… 8
Ph. 3　遺構1（南から） …… 9
Ph. 4　包含層土層（東から） …… 9
Ph. 5　遺構1集石と出土土器 …… 10

例　　言

1．本書は都市計画道路博多駅五十川線整備に先だって、福岡市教育委員会が1996年10月14日～11月15日にかけて行なった那珂遺跡群第59次調査の報告書である。那珂遺跡群としては21冊目の報告書である。
2．検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡1、溝2のように記述し、性格不明のものについてはそのまま遺構1などと記述する。
3．本書で使用する方位は磁北である。
4．本書で使用した遺構実測図は宮井善朗が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
5．本書で使用した遺物の実測図は宮井の他荒川直子（福岡大学）が作成した。また製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
6．本書使用の写真は、宮井が撮影したものである。
7．遺物実測図の番号は福岡市埋蔵文化財センター収蔵時の登録番号である。
8．本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9．本書の執筆、編集は宮井が行なった。

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

1992年10月２日付けで、土木局街路課より、博多区竹下５丁目～那珂６丁目地内における埋蔵文化財の有無についての事前調査依頼が出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群内に含まれることから、埋蔵文化財課では事前調査依頼を受けて試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構、遺物が検出された。この成果をもとに協議を行ない、遺構の遺存する部分においては発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、工事の工程の関係から３次に分けて行なうこととなった（那珂遺跡群第51、52、59次）。このうち51次、52次については既に報告書が刊行されている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第525集）。第59次調査は1996年10月14日に着手し、11月15日に終了した。

２．調査体制

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花剛（前）　町田英俊（現）

調査総括　埋蔵文化財課　課長　荒巻輝勝

　　第２係長　山口譲治

調査庶務　埋蔵文化財課第１係　内野保基

調査担当　埋蔵文化財課第２係　宮井善朗

調査作業　野村道夫　楠林司朗　河野龍哉　森田祐子　古賀典子　持丸玲子　平田浩美　山村スミ子　綟川ゆかり　森山キヨ子　石川洋子　篠原恵子　鍋山治子　坂本俊子

整理作業　藤信子　佐々木涼子　大石加代子　林由紀子　太田順子　武田祐子　荒川直子（福岡大学）

また調査時の条件整備等に関して土木局街路課に多くのご配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

遺跡調査番号	９６４５		遺跡略号	ＮＡＫ－59	
調査地地番	福岡市博多区那珂６丁目地内				
開発面積	180㎡	調査対象面積	180㎡	調査面積	177.5㎡
調査期間	1995年10月14日～11月15日	分布地図番号	38-0085		

Ⅱ.調査の記録

１．概要

調査地点は那珂遺跡群の南西端にあたる。那珂川に面した台地の縁辺部である。今回調査地点は、調査区の南端に台地部分がわずかに残るが、中央やや南よりから北側にかけて、段落ちになる。段の南端はかなり急な斜面となるが、北に向かってゆるやかに起伏し、北側には明確な肩が無い。段落ちの床面には不定形の土壙が散在するほか、人為的な掘り込みと思われる溝２条、大形のピット３基を検出した。台地部分はかなり削平されていると考えられ、溝１条、ピットを検出したのみである。出土遺物は総量でコンテナ８箱である。ほとんどが段落ち覆土である包含層からの出土である。包含層内の遺物は、奈良時代のものを主体とし、段落ちが埋まった跡に、平安時代～中世遺物を包含する層が堆積している。

2．事業地内の既往の調査

事業地内では先述したように既に２次にわたって調査が行なわれ、また関連の調査も合わせると３次にわたる(51～53次調査)。既に報告されているが、ここに概要を紹介しておく。第51次、52次調査は弥生時代初頭の二重環濠が検出された37次調査地点に隣接し、環濠の延長の確認を目的としている。その結果、51次地点では削平されていたが、52次、53次地点では延長が確認されている。52次調査ではこの他、今回調査地点に最も近い地点で古墳時代後期以降とされる２列の柱列が検出されている。古墳時代の遺構は53次地点でも溝、井戸などが検出されている。

3．検出遺構（Ｆｉｇ．３）

検出遺構は包含層下面検出の遺構群と、台地面検出の遺構群に別れる。まず台地面検出遺構について述べる。南半区ではローム面が表土直下で検出され、標高8.7ｍほどを測る。台地上では溝１条とピットを検出した。**溝12**は幅0.9～１ｍ、深さ10cmに満たない極めて浅い溝である。出土遺物はない。ピットは南端に集中するする傾向は見られるが、並ぶような状況にはない。深さは20cm～30cmほどである。調査区南端から10ｍ付近の位置からローム面は緩やかに落ち始め、12ｍほどの所から急激に落ち込む。段落ちの下場で、標高7.2～7.5ｍほどを測る。段落ち部は再び北側に向かって緩やかに上がって行き、調査区北端部では、標高８ｍほどになる。59次調査地点から道路を挟んで北側の52次調査地点では標高8.6～8.7ｍほどで掘立柱建物などが検出されており、再び台地面につらなっていくことがわかる。従って今回検出された段落ちは、南から入り込む浅い谷部に当たるものと考えられる。　段落ち部の床面には人為的とも自然のものともつかない凹凸が見られる。比較的大形で遺物の多いものについて報告する。**遺構１**は円形に近い落ち込みである。径５ｍ程を測る。深さは最も深いところで検出面か

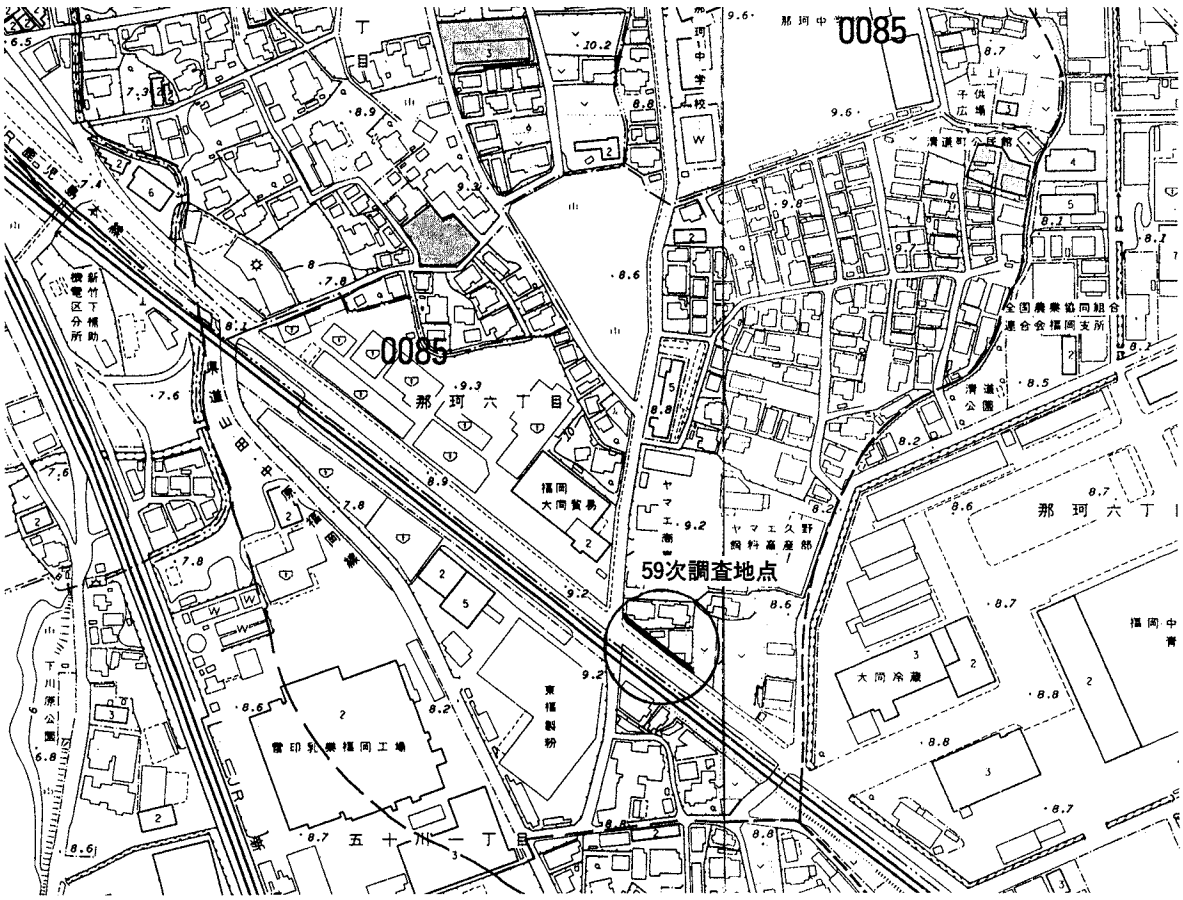


Fig. 1　調査地点図(1：4000)

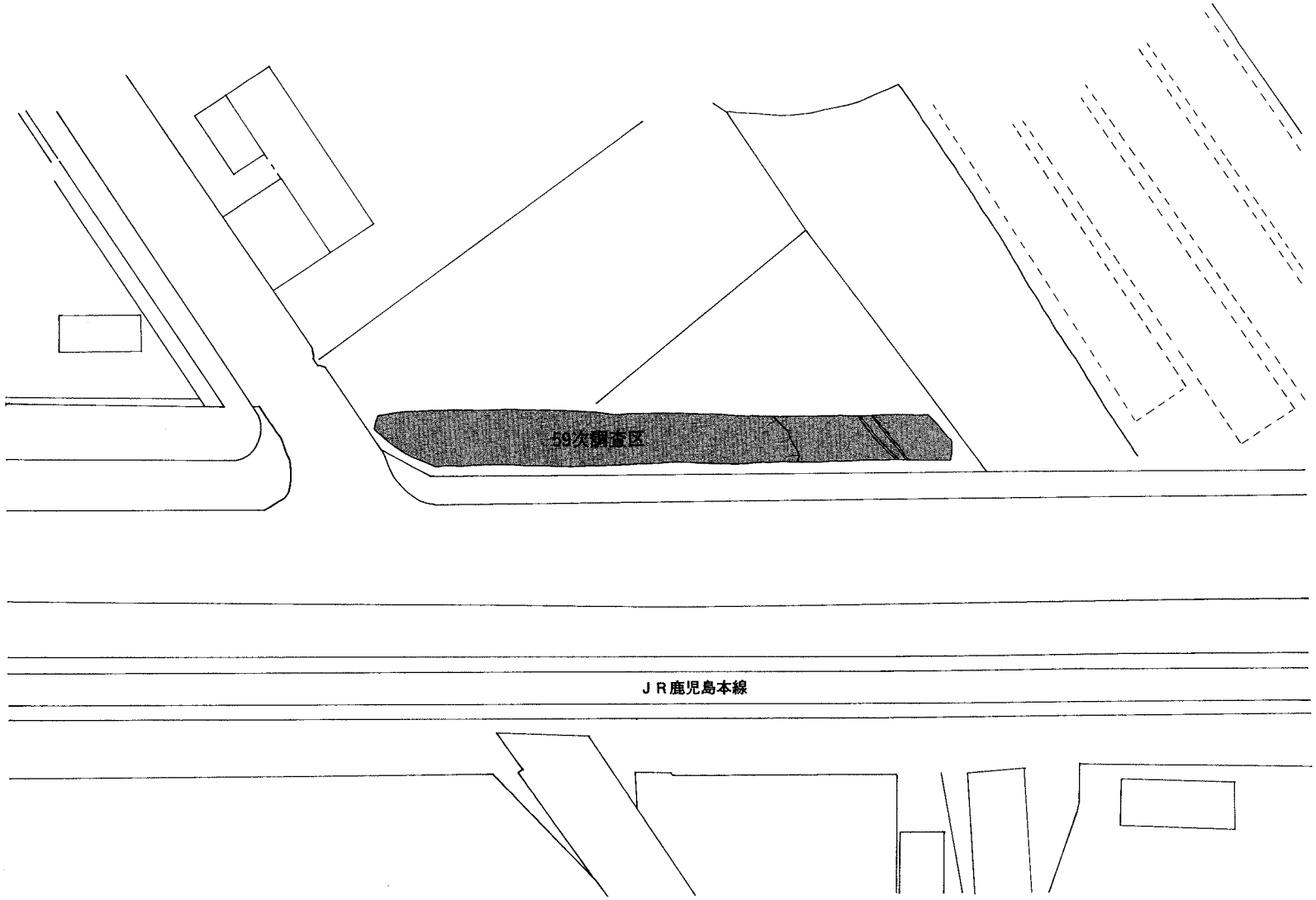


Fig. 2　調査区位置図(1：500)

ら50cm程を測る。遺構１の床面自体も凹凸が多い。南端近くに人頭大の礫が集積されている。出土状況から流れ込みではないと思われる。**遺構２**は調査区北端付近で検出した落ち込みである。円形土壙が重複したような不定形を呈する。幅３～４ｍを測る。深さは20cm程である。床面近くに遺物が散漫に散布する。**溝４**、**５**は切り合うが、先後関係は不明である。溝４は幅1.5m程で、深さ10～20cmを測る。東側にいくにつれて浅くなる。溝５は幅１ｍほどを測る。南側が一段深くなる二段掘り状を呈する。深さは段上で20cm程、段落ち下で40cm程を測る。溝４、５は比較的整った形態で、直線的であり、人為的な遺構の可能性が強いものと考えられる。**遺構６**、**遺構10**、**遺構11**は円形を呈する遺構である。遺構６は径1.4m、深さ20cm程を測る。

４．包含層（Ｆｉｇ．４）

段落ち部には厚さ１ｍほどの包含層が堆積している。20cm～30cmほどの厚さで順次堆積している。１～６層はいずれも古代の土器を主体とし、古墳時代後期の土器をわずかに混える。奈良時代の堆積と考えられる。最上層の０層は古代後期から中世の遺物を含み、更に台地部の上面にまで延びている。谷部の埋積後の堆積土である。

５．出土遺物（Ｆｉｇ．５）

遺構出土の土器を中心に図示した。１は須恵器高坏脚である。比較的太い脚で、端部は坦面をなす。透しはない。外面は回転ヘラ削りの後回転ナデを施す。６も須恵器高坏脚である。脚柱部が細く、脚端が大きく開く。二段に長方形の透しを持ち、おそらく４ヵ所に持つと考えられる。透しの間に沈線が２条巡る。外面は回転ヘラ削りの後回転ナデを施す。３は土師器の高坏脚である。透しはないが、脚柱部中位に沈線状の段が巡る。４は須恵器の小形壷である。口縁端部は玉縁状を呈する。内面は同心円文の当て具痕が見られ、外面は格子目か擬格子の叩きと思われる。５は須恵器の甕で、口縁部は断面方形を呈する。２は土師器の小形甕である。口縁は短く屈曲し、胴が張る。外面に煤が付着する。以上は遺構１出土である。

７は須恵器の鉢である。外面最大径部より下位は回転ヘラ削りを施す。９は須恵器高坏脚である。透しはなく、脚柱部中位に沈線を２条巡らす。10も須恵器高坏脚である。比較的短脚と考えられ、脚柱部は太く、脚端は大きく開く。端部は段を持つ。透しはない。８は土師器坏である。体部は内湾しながら大きく開く。底部は小さく、回転ヘラ削りを施す。口径14cmを測る。11は須恵器坏である。口径は13cmを測る。体部は直線的に開く。体部と底部の境には甘い稜が立つ。高台は華奢で、底部端から若干内側につく。外底部にはナデを施す。以上は遺構２出土遺物である。

12は溝５出土の須恵器坏である。返り部は外反しながら立ち上がる。外底部には回転ヘラ削りを施す。口径13cmに復元される。

13は須恵器蓋である。天井部のみに回転ヘラ削りを施す。14は筒型の底部である。平底で体部は直立気味に立上り、厚手である。底部に近い体部には回転ヘラ削りを施す。17は須恵器蓋である。つまみは剝離していると思われるが、磨滅が著しく明らかでない。天井部の回転ヘラ削りも定かでないが、施されてないようである。口径15cmを測る。16も須恵器蓋である。完形品で、つまみはない。ほぼ天井部全面に回転ヘラ削りを施す。内面には回転ナデを施す。口径10.8cmを測る。

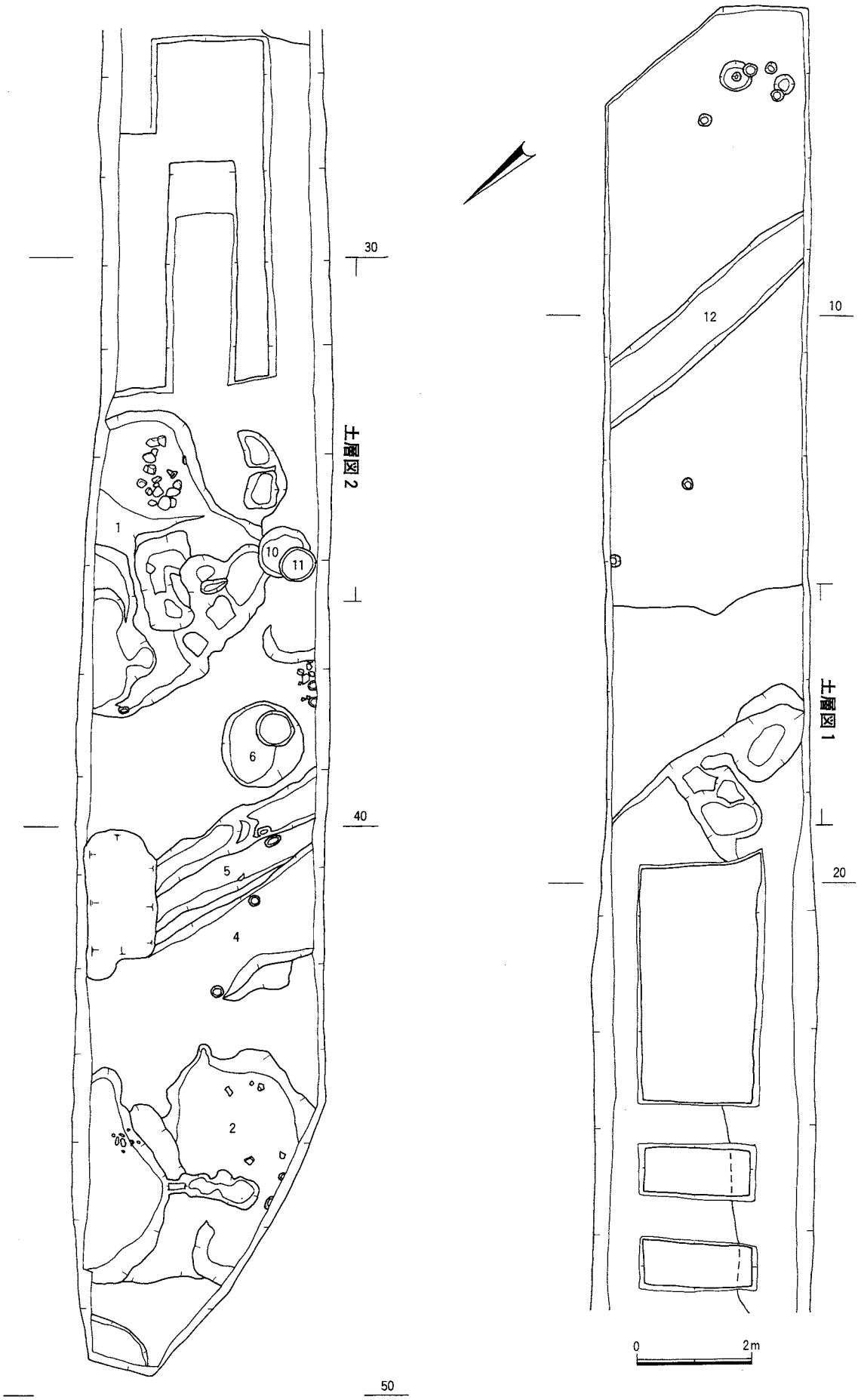
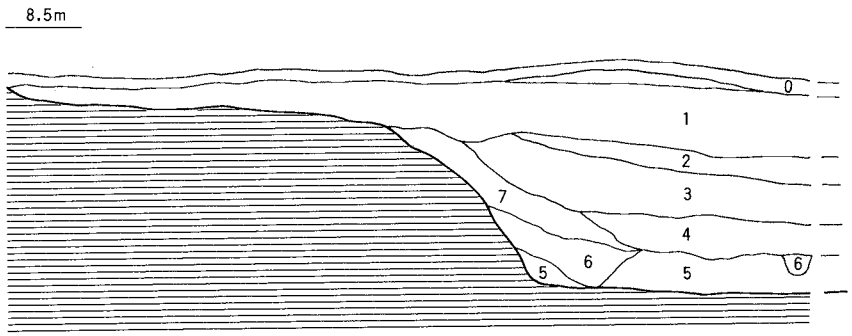
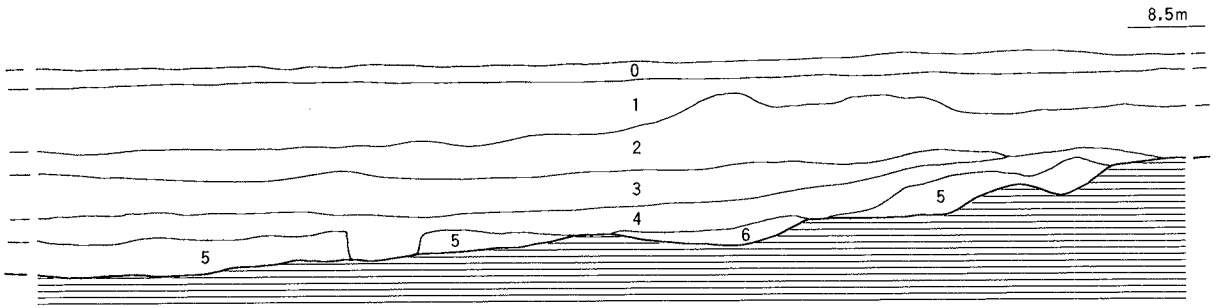


Fig. 3　遺構配置図（1：100）



0．にぶい黄褐　10YR5/4　粘質シルト
1．灰赤　2.5YR　4/2　粘質シルト
2．暗赤褐　5YR4/3　シルト質粘土
3．灰褐　7.5　5YR5/3　シルト質粘土
4．灰褐　5YR4/2　3に地山ブロック小粒多く混じる
5．橙色ローム地山埋戻し　7.5YR6/6
6．3と地山ブロックの混合層

土層図1



土層図2

0　2m

Fig. 4　包含層土層図(1：40)

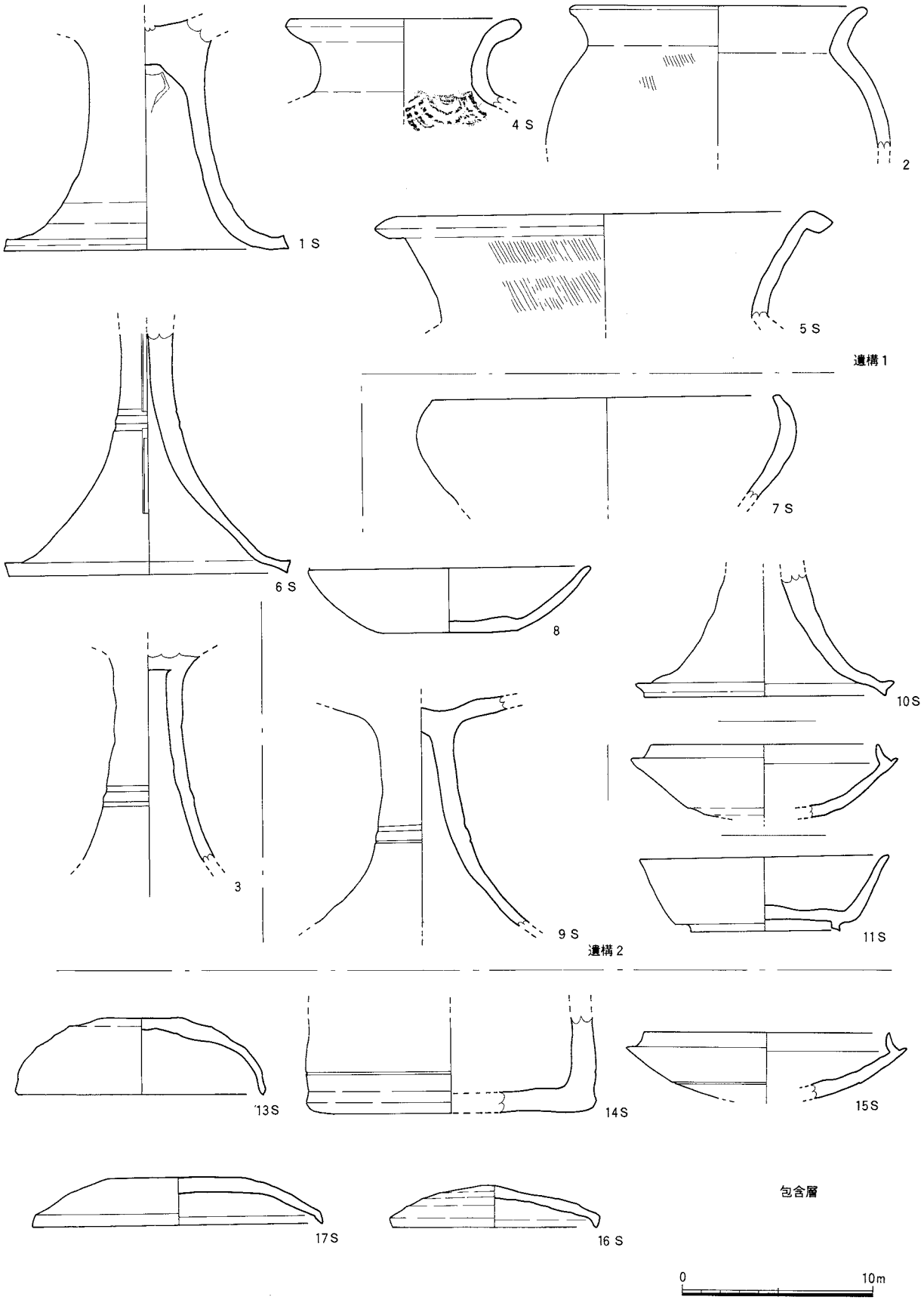
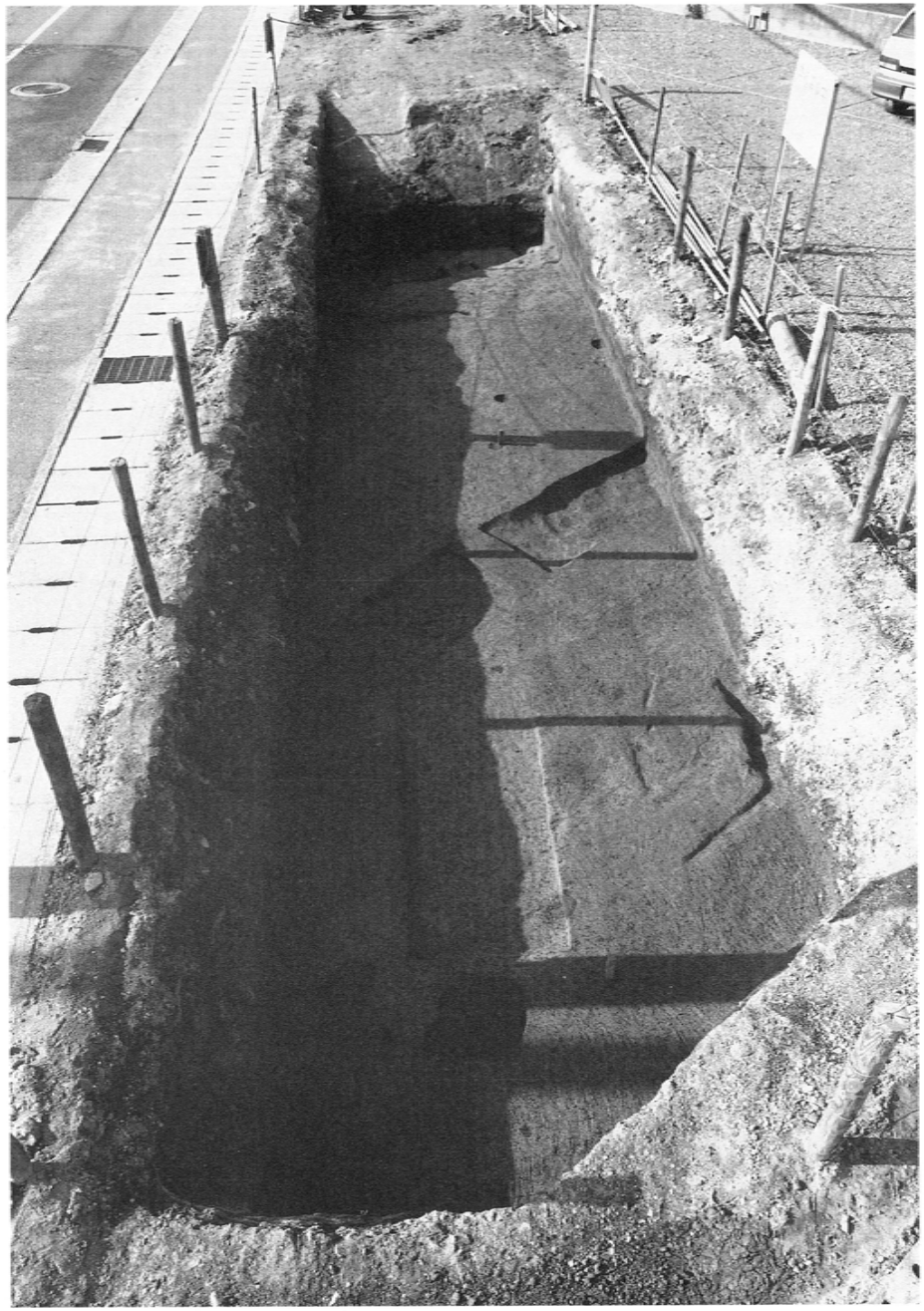


Fig. 5　出土遺物（1：3）



Ph. 1　南半区全景（南から）

Ph. 2　北半区全景（南から）

Ph. 3　遺構１（南から）

Ph. 4　包含層土層（東から）

Ph. 5　遺構１集石と出土土器

Ⅲ．小結

今回の調査では、調査面積も狭く、明らかになったことはそれほど多くはない。ただ北に隣接する52次調査地点で検出された柱列群が、59次地点までは伸びないこと、またその間に谷部が入り込み、地形的にも画されていることが明らかになった。この点は柱列の性格や範囲を考えながら、今後の周辺調査を進めていくに当たっては、参考となる成果と考えられる。59次調査地点が位置する那珂遺跡南西端周辺は、とくに古代の遺構、遺物が密に分布することで知られている。その中には初期の瓦など、注目すべき遺物が多い。更に南に目を向けると、五十川遺跡でも古代の墓、集落などが明らかになりつつあるし、その南の井尻Ｂ遺跡では、百済系単弁軒丸瓦などが多量に出土する。最近井尻Ｂ遺跡10次調査地点では古代の大形掘立柱建物が検出されている。この那珂川東岸の台地に乗る古代の遺構群についても、今後注目すべき成果が期待できよう。

那 珂 遺 跡 群 21

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書
〈第564集〉

編集・発行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神一丁目8-1
平成10年３月31日
☎092（711）4667

印　　刷　ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田三丁目9-32

那珂遺跡群21

—第59次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第564集

1998年

福岡市教育委員会